

## 第54回中学生作文コンクール

都道府県別賞一等

目指そう、保険加入率百パーセント

徳島県 徳島文理中学校 三年生

大本 泉

「お変わりございませんか？」

赤い文字で、このように書かれた、父宛ての郵便が届いた。封筒の右端には「重要」とも書かれていた。母に

「これ届いているけど、何？」

と聞いたところ、母は封筒を開け、書類を見せてくれた。それは、父が加入している生命保険の書類であった。

「お父さんがね、泉が生まれてすぐにこの保険に加入したの。お父さんの体に何かあったら、泉を育てていけないから、そのために入ったの。だから、毎年、お父さんの誕生日前後に、この書類が届くのよ。」

私は、今までこの保険のことは何も知らなかった。十五年、かけ続けていてくれたことを。両親の、私に対する深い愛情に、言葉にならない感謝の気持ちがこみ上げてきた。

このことを機に、他に何か保険に加入しているのか、母に聞いてみた。すると、私が高校を卒業するときに満期になり、そのお金を大学の入学金や授業料などに使える保険に加入していることを知った。

「被保険者・・・大本泉」

契約者は、母の名前。加入年月日は、私の生後五カ月目のときの保険証券を見せてくれた。母が、

「教育というものは、そのときでないとできないの。どうしても必要になるお金を、急に用意することができないから、予めの準備として考えておいたのよ。」と言った。有難い母の言葉であった。

毎日生活していたら、食費をはじめ、光熱費や医療費等、必要経費がたくさんある。限られた一カ月の収入の中で、工面して、私のためにかけてくれている、これら二つの保険。そして、毎月、両親の銀行口座から保険料が引き落とされていることを知り、改めて胸が熱くなった。

私のために加入してもらっている保険では、私が小さいときに何度も入院して、給付金をもらったことを母から聞いた。入院すると、医療費以外にも、いろいろな出費がかさむけれど、給付金をもらうことで非常に助かった、と母が言っていた。看病のため、仕事を休むので、収入もなくなる。そのようなとき、給付金のお陰で必要な物も購入できるということは、まさに保険は「宝物」

## 第54回中学生作文コンクール

であると思う。

現在の日本では、男女共に約八割の人が保険に加入していることが、調べて分かったことである。自分や家族を守るために、自分の目的に合った保険に、種類を選んで契約することが大切であると思う。日本の社会保障制度は非常に充実しているが、十分ではない。それを補うために「生命保険」が役立つと思う。私の家でも言えることであるが、毎月の保険料は家計を圧迫することもある。しかし、もしもの場合に備えて、保険に加入しておく必要性がある。貯金であれば、その金額に応じて利息がただけであるが、生命保険は、保障が手厚いのが特徴である。保障が充実していたら、安心して生活ができると思う。今から三年余りすると、私は高校を卒業する。そのときに、母が契約してくれている保険を利用して、大学に進学したいと思っている。両親に対する「恩返し」の気持ちを忘れず、大学では勉学に励みたいと思っている。

全ての人が「保険」に対して高い知識を持ち、加入者が一人でも多くなることが、これからの課題であると思う。私が社会人になったときには、次第に年齢を重ねる両親のために、保険に加入したいと思っている。そうすることが、これからの「少子高齢化社会」を活性化させる原動力になることだろう。保険加入によって、安心でき、心が潤うベースを作り、さらにそこから、豊かな社会を構築できるようになりたいと思う。